
WANDERERS FROM Ys AnotherStory =**深緑の森精**=

栄華卑弥都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WANDERERS FROM Ys Another Story
Y Ⅱ 深緑の森精Ⅱ

【Nコード】

N7330F

【作者名】

栄華卑弥都

【あらすじ】

エステリアでの冒険を終えたアドルは再び、旅立った。当て所ない旅を続けるつもりでいたがエステリアで知り合った盗賊・ドギの故郷、レドモンド地方の近くまで立ち寄ったのを切っ掛けにアドルはドギの案内の元、レドモンドに向かうこととなる。そんな折、ドギは少し旧友に会いに行くといい、レドモンド国境付近の村で再会を約束し、彼はしばらくぶりなのんびりとした旅を楽しんでいた…。物語は…ある不吉な噂のあった「迷いの森」の近くの小高い丘より

始まった…

第一部「I met met met・・・」(前書き)

ゲーム会社「Falcom」の作品、Ysをモチーフにした小説です。物語は、WANDERERS FROM Ys (Ys3)の前物語としたもので、完全な私のオリジナルストーリーとなっております。ゲーム「Ys」のイメージを崩すのが嫌な方は、ご覧頂く事をご遠慮ください。

第一部「I met met met・・・」

初夏の暑さを思わず日差しの中、清涼すずしさを含む風が舞い踊っていた。

その少年は小高い丘の上で一息つき、ふもとの村で調達した水を喉に流し込む。

そして、ゆっくりとその真紅の髪を掻き上げると、風が悪戯いたずらに戯れ、笑うように彼の周りを駆け巡っていく。

それが少年の心を潤していった。

空と同じ蒼色の瞳は優しさをたたえ、流れる空と風の奏でる草木の歌に体を預けていた。

……

ふと、少年は耳を澄ませる。

相変わらず…風達が楽しそうに舞い、草木の歌で彼に語りかけている。

その中に響く…かすかな異変…

不意に少年は傍らの道具袋を乱暴に担ぎ上げ、一気に丘を駆け下りた。

草木の歌は道を外れた少年の足にかき消され、風は悲鳴を上げて、彼の後ろへと飛び去っていく。

だが、少年は構わず駆け下り、その剣を手に取り、深い銀の輝きが彼の手の中で踊りでる。

そして、少年は道無き深緑の森へと飛び込んでいった。

深緑の中、闇にくすんだ別世界を少年は銀の閃きを走らせ、ガサッ

…と不意に大きな広場に躍り出た。

緑の匂いが日光の匂いと混じり、彼の鼻腔をくすぐる。

その右手に少女が大木を背に座り込んでいる。

淡い深緑の輝きをたたえた瞳にただ、怯えを浮かべて…少年を見つめる。

走り続けていたせいであろう。その白い肌にきらびやかな汗を浮かべ、速い息遣いで…木を背に背負ってるにもかかわらず…後ずるう…としている。

瞬間、少年は少女に背を向け、寝かせた刃で頭を守るように剣を掲げた。

ギーーンという甲高い金属音が鳴り響き、木漏れ日の中、火花が舞った。

剣に当たったのは剣…それも赤錆と刃こぼれが見える薄汚いショートソード。

それを握るものも、…彼女を追いかけていたのだろう…異様に生臭い体臭を漂わせた薄汚い顔の男だった。

「ギイイ…」

男は憎らしげに少年を見、力任せに剣を押し。

荷重が加わり、一瞬少年の顔が苦渋に見せたが、少しだけ微笑し、力を揺るめ、男の脇をすり抜ける。

拮抗を失った力は男を無様によるめかせ、剣の半身が勢いよく地面に突き刺さる。

ひれ伏す男に少年はすつと、銀の剣先を首筋に当てた。

静寂…

「ぐくつ…！」

男はそんな声を上げ、転がるように森の中へ消えていった。

緊張は程なく途切れ、危険を感じなくなると少年はその剣を元ある

べき鞞の中へと収め、ゆつくりと少女のほうに振り返る。

少女の表情には多少の怯えが残っているものの、少なからず安堵したのだろう。

強張った足から力が抜けたかのように…腰を落としていた。

「大丈夫ですか？どこか怪我はされてないでしょうか…」

スツと差し出された少年の手にオズオズと少女は触れ、優しく引き起こされる。

「はい、ありがとうございます…」しばらく、自分の身だしなみを確かめた後、少女は少年に話しかける。

「私はファエル、この先の村に住んでいるものです。あの…」

「……」少年はただ優しく微笑み、口ごもる少女に名を明かした。

「僕はアドル。アドル…クリSTEIN…いろいろと諸国を回っており、世界の不思議を探求する者です」

第二部「I look look look・・・」

樹木立ち並び、険しさの増す暗い森の道をアドルはファエルに誘われるまま、道なき道を歩く…。

ただ、ファエルが歩く先はさほど苦もなく、ただ楽でもなく…樹木の根に足を奪われることもしばしばあった。

それにファエルがケラケラと可笑しそうに笑うのにアドルは少なからず眉を曲げてしまったが、その無邪気な笑顔の前には頬を緩め、苦笑いを返すだけであった。

「ほら、もう少しだよ」

ファエルは前方を指差し、少し息が上がり、汗浮かぶアドルの顔を笑いながらに語る。

言われ、面を上げるアドルの眼前に、森の終わりを告げる…白乱の輝きが黒い木々のシルエットを浮かびあげる。

ファエルの顔は逆光でうかがえなかったが、アドルの顔を見てケラケラと笑っているのが分かった。

「早く行こう」

ファエルはアドルに背を向けて、走り出す。今までの森の道にも疲れた様子も無いらしく、変わらない足取りで樹木の根を跳ねるように避けて、光の中に消えた。

アドルはそれを見送り…一息つき、額の汗を袖で拭き、…ゆっくりと彼女の後を追った。

明順応に従い、森を抜ける頃、視力は回復していき、その光景がアドルの目に映る。

静かな村である。

井戸で水をくみ上げる女性。踏みしめられて裸になった土の上を駆け巡る子供。軒先でのんびりとしている老人。猟にでも出かけるのか、弓を携えた青年。そして、生活臭あふれる煙の昇る家々。

どこにでもある…小さな村である。

ただ、アドルは少なからず、驚きを隠せない。丘から歩いて、感覚で半刻程…。

決して高くはない丘ではあったが、歩く距離を考えてもあそこから望めないほど…小さな村ではない。

…小さな…村ではない…人と家の数…

「ファエル!!」

「母さん!!」

呆然と村を見つめるアドルだったが、ファエルともう一人の女性の声で思考を止めて、声の方を見る。

ファエルが村人の一人の女性…ファエルの言う「母親」…に抱きつき、強く抱きしめられている。

「もうこの子は…あれほど村を一人で出るなどいったのに…」

「ごめんなさい、ごめんなさい…」

元々少数ではあるが、それでも彼女は村人に囲まれる中、ファエルの背に合わせて屈んだ母親が聞かん坊を諭すように柔らかい口調で話し始めると、ファエルはその翠の瞳に涙を溜めて、しきりに謝っている。

アドルはその光景に少なからず安堵を覚え、再びファエルの元へと歩を進める。

「アドルっていう人なの。私、あの人に助けてもらったの」

アドルの存在に怪訝に見る村人達にファエルは声高に言っ、彼を村人達に紹介する。

「まあ、それは…娘が大変お世話に…どうもありがとうございます」

「いえ、当然のことをしたまでですよ」アドルは、立ち上がり面を下げる母親に軽く右手を出して、につこりとした。

「無事、ファエルさんも村にお届けできたので、私はこれで」

… …

「もういつちゃうの？アドル」村を後にしようとするアドルをフェアルが呼び止めた。

「もう暗くなっちゃうよ。森の中で迷っちゃうよ…泊まっていってよ」

アドルはフェアルの言葉に振り返り、「そんなこと…」とだけ答え、後の言葉を失った。

空が紅く色づき…、夕闇にと変わりかけている。

丘にたどり着いたのはまだ朝日が昇り、ようやく暖かさをおぼえだす日中だった。

森の中を半刻だけしか歩いていないと考えていた彼には驚愕であり、「まさか…」とだけ、言わせた。

もしくは、闇夜の暗さにも似た森を歩いたことが、時間の感覚を狂わせていた…か。

けれど、アドルは未だ信じられず、握っていた道具袋の紐を持つ手が緩み、ドサツと音を立てて、彼の足へ寄りかかる。

「どうしたの？」

彼女の…フェアルの…不思議そうな声にアドルは、ようやく現実に戻るが、引きつった顔はしばらく戻りそうに無い気分だった。

「いっぱい、御もてなししちゃうから、それとアドルの冒険のお話とか聞きたいよ〜」

フェアルがアドルの周りをピョンピョンと駆け回り、軽く下を向くアドルを仰ぎ見る。

それにアドルはゆっくりと「ああ、…そうだね…」と答える。

「じゃあ、早く帰ろう」

フェアルはアドルの返事に気を良くして、左手で落ちた荷物の紐を取り、右手で彼の腕を掴むと、引きずるように歩きだす。

村人はその光景をニコニコと見送った。

アドルは違和感に混乱していた。根拠の見つからない問答に……
ただ、それも気の迷い、思い過ごしと思いい、気を持ち直した頃……

アドルはファエルの家へとたどりついていた。

第三部「I talk talk talk . . .」

ファエルの家のもてなしは決して華やかなものではなかったが、家庭の温かみがあり、アドルはゆっくりとした休息を向かえることができた。

出された食事も何かの实のスープとウサギ肉、大麦パンと質素なものであったが、その実はとても不思議な食感のある珍味であった。ファエルの両親が言うには、この森で取れる植物のためだというのが、アドルの「美味しいですよ」という言葉に安堵と嬉しさを交えた笑みを見せてくれる。

蔵かに食事が終わるやいなや、ファエルがアドルに飛びつくように駆け寄った。キラキラとその瞳を輝かせて：

「この村に来客者は久しぶりですから…」

アドルはファエルの瞳に眩しさを感じながら、父親の少々申し訳なさを感じる言葉に苦笑を見せてから、ファエルに向き直る。

「さて、どんなお話からしてあげようか」

そんなアドルの前振りにファエルはいつそう瞳を輝かせて：彼を食い入るように見つめ続けている。

アドルは今までの冒険をゆっくりと語った。

エステリア、セルセタ…イス…

多くの魔物と戦いながら、多くの人々との出会いと助けを受けた日々、仲間…そして

ファエルはその言葉を一字たりとも逃さないようにアドルを見つめ、話々に表情をコロコロと変えて、彼の顔を見つめ続けていた。

「ファエル、いい加減になさい…」

ファエルにとって、あまりに意外な言葉だったのだろう。そんな

母親の言葉に眉を上げて、抗議の目を向ける。

「アドルさんは長旅で疲れているのよ…もうそろそろお休みさせてあげなさい」

「私、もつとアドルの話を聞きた〜い…」

ファエルは尚も駄々をこね、話すもんかとアドルの腕に抱きつくのに、アドルも母親も苦笑が漏れてしまった。

「ファエル、分かったよ…じゃあ、続きは部屋で続けよう…それならいいだろう」

「本当！！」

ファエルはそんなアドルの言葉に瞳を輝かせる。アドルは優しく微笑み、うなずいてみせる。

「やったー」さらに一層、その瞳に輝きを増したファエルはピョンピョンと跳ねまわる。

「じゃあ、アドルも早く行くよ」

「ファエル、あなたは寝る準備をしてからになさい。アドルさんも整理されたい荷物もあるでしょう」

早く早くと手を引くファエルに母親は軽く手の平で頭を叩き、アドルから引き剥がすと廊下へと押しやった。

「分かったわよ、母さん…じゃあ、早く来てよ」

ファエルは最後まで母親に抵抗したが、アドルの「分かっているよ」という言葉に納得し、足早に駆け出ていった…。

「申し訳ないですね」しばらくの静寂にアドルが溜め息を吐くのに、母親は申し訳なさそうに頭を下げた。

「こんな村ですから…アドルさんのようにお若い方が尋ねられることも少ないので…ファエルも物珍しいのでしょうか」

「いいえ、お気になさらずに」アドルはそんな母親の言葉に首を横に振る。

「…あの頃の世代が元気なのが一番ですよ…それでお部屋はどこを使えばいいのでしょうか？」

アドルは母親の気遣いに感謝の表情を見せて、席を立った。

母親に案内された二階の部屋の前で蠟燭を借り受けて、部屋に入ると…既にファエルの姿があり、ベッドの上に陣取り、にっこりとアドルに微笑みかける。まだまだ休息は取れそうにない。

アドルは溜め息を吐いた…。

「長い夜になりそうだ」

それから、しばらく（アドルにとっては長い間）して、ファエルは聞き疲れからか、トロンとした表情を見せ、しばしば目を擦る仕草を見せ始める。

アドルの「大丈夫？」という言葉にウンウンとうなずいていたが…それが船漕ぎに変わるのはさほどかからなかった。

「ファエル？」

アドルの話の半ば、気づくとファエルはスーサー寝息を立てて、寝入っていた。

その光景にアドルは頬を緩め、一息つく。

「さて」と、彼は辺りを見回した。辺りは静まり返り、天窓から降り注ぐ月光がベッドの上で眠るファエルを照らし出している。彼女の両親も寝に入ったのだろう。部屋の外も静寂に包まれていた。

ファエルの部屋が分からない…。その事に彼は少し、眉をひそめて、部屋の中をかえりみて、仕方ないと溜め息を吐き、道具袋からマントを取り出し、包まった。

雨風や魔物を凌げるだけありがたいと考えながら…彼もまた、眠りについた。

空に浮かぶ月光はそんな二人の姿を優しく照らし…静寂を見守っていた。

第四部「I can can can . . .」

何かが覆いかぶさる夢であった。それは何度となく切りつけても切れることはなく…彼を苦しめる。

苦しい…胸が詰まらせるような苦しさ…寝苦しさにアドルは目覚めてしまった。

夜明け前なのだろう。天窓に軽い朝日が差し込んでいるかのよう
に白い空を見せている。

アドルは軽く額をぬぐう…じつとりと脂汗にまみれた額だった。

…彼は夢を思い出そうとし…目を閉じ、息を整えた…。

何も思い浮かばない…ただ、目を閉じた空間の黒さだけが脳裏に
焼きついた…。

彼は一度大きく息を吐き、整え、目を開ける…。ベッドに視線を
向けると…ファエルの姿があった…。

「……………」

アドルは軽く壁に頭を押し付け、立ち上がる。

体をくるめていたマントを羽織り、荷物袋を背負い、剣を腰に携
える。

そして、手をノブにかけようとした時…

ゾクッ…

寒気にも…体に痺れにも似た警戒音が体に走り、振り返る。

「アドル…」

ファエルがいる。いつの間にか起きたのだろう…気配さえ感じなか
った。

彼女は腰だけ起こし、面を下げた…前髪の間からかすかに覗く瞳がアドルを見つめている。

悲しく輝き、何か見下したような哀れみを込めた瞳がアドルを射すくめる。

「いっちょやうの…」彼女の髪が揺れる。

「アドルもいっちょやうの…」

揺れている。窓も閉めきり、風もないはずの室内で揺れ動く。

それは次第にザワメキ、まるでメデューサの髪のように蠢き広がり始める。

「!!!」

ファエルに気を取られていたアドルは背後の異変に気づき、剣を居合い抜き、軽いステップを見せ、背後を切り上げる。

グガアアアアアアア!!

二つに分断された扉が悲痛な叫びを上げ、緑色の体液を撒きちらす。

奇妙に節くれた手に変容したノブがアドルのいた場所で痙攣を起こし、覗き窓は異様に血走った目となり、憎しげに彼を見つめ、背後に倒れていく。

アドルは緑色にまみれながら、再度ファエルを一瞥すると、残ったドアを蹴り飛ばし、部屋を飛び出した。

彼女の姿にはほとんど変わりはなかった。

ただ、髪の影で見えなくなったはずなのに翡翠色の瞳が…煌々と輝き、彼を見つめている。

「……………!!!」

アドルはその状況に少し戸惑いを見せたものの、足元が変動し始めたのに我に返った。

今や、ドアだけではない。家自体が巨大な食肉植物に様変わりを始めたようだった。

「…くっ！！」

今一度、ファエルを見つめ、抜き身の剣を彼女に向けようとしたが、苦渋をかみ締めた顔を向け、階下を目指し、廊下をかけた。だした。

いまや、あの暖かさのあふれた木造の家は蠕動し、まるで奇怪な寄生虫の腹のような風貌に変わっていく。

アドルはそれを踏み抜き、切り払い、転げ出る様に外に飛び出し、その異変に今までの違和感に実感を覚える。

巨大な空洞：そこは何かの植物のウロのような世界だった。

時間の感覚もなく、日が陰る村：それはこの変動する洞窟が正体だったのだ…。

アドルは周囲に眼を走らせる。

あののどかな村は既に消え、異彩な美術に施された残骸が見えるばかり…

そして、

「！！！」

アドルは剣と背後に背負っていた盾を構える。家の残骸から蠢く影が次々と現われ、彼に直進してくる。

体中に節を携えた木人がゆっくりと歩み寄る。

「逃げないで…」

背後：正確には頭上から声が降り注ぐ。ファエルが屋根に立っていた。

「もつとお話して…」

アドルは、振り向きもせず駆け出す。剣の白銀の尾を閃かせ、木人を葬りながら、この世界を駆け巡る。

その一縷の望みを求め…

そんなのないのに…

何かが、微笑むような優しい口調で耳元にささやきかける。

逃げる道なんて無いのに…

駆け巡るアドルの周りに緑色の光が幾重にも浮かび上がる。

だから、お話して…

光は人の形を成していく。

アドル

一つ一つがファエルの形に変わり…アドルを囲うように降り立った。

息も絶えそうなアドルはゆっくりと剣をそのひとつに向ける。

ファエル達はただ歩み寄る…どこか妖艶にも見える笑顔のままで…

剣の先が振るえる。アドルの顔が苦渋をかみ締めるように歪む。

体を動かすこともできない。

そして、…

アドルの足元がぽっかりと大きな口を開けたかと思うと、その暗闇の中へ…彼を引き込んでいった…。

第五部「I may may may . . .」

ねえ、お話の続きをして…アドル…

「もうお話は終わりさ…」

暗闇の中、木の根に埋め込まれた胸像のようになっていたアドルはその姿のないフェアルの言葉に軽く首を横に振る。

もっとしてよ…

「僕にはもうお話できるものはないよ…フェアル」

アドルの言葉には変わることがなかった…

私は、外に出たことがないの

だから、外のことを知りたいの…

だから…

「僕のお話の続きはもうないんだよ…僕には…今まで経験した事では…話すことはできない…」

暗闇の中でアドルは苦笑にも似た微笑が漏れる…。

何より…まどろみを感じ始めていた…。

「僕は物書きじゃないからね…冒険者だから…お話も…冒険でしか…言え…ない…んだ…」

まどろみが襲う…眠気が襲う…急激な体力の浪費を感じる…。

草木が土より養分を吸うかのように…アドルの体力を吸収している…。

けれど、彼は抗うことができない…失われていく体力を少しでも取り戻そうと…体は眠りを欲する…。

もつできないの、アドル…

お話できないの…

私、もっと聞きたいよ…もっと聞きたいよ…

私は、ここから出て行けないから…もっと、お話が知りたいの…
ワクワクがほしいの、ドキドキがほしいの…

「…ファエル…、ドキドキもワクワクも…お話だけじゃ…ダメ…なんだ…よ…」

アドルはゆっくりと目を閉じる。

「自分で体験して…は…じ…めて…それが…わか…る………ん」
そして、彼の瞳は本当の暗闇に閉ざされた…

アドル、ドキドキもなくなるの…ワクワクもなくなるの…

アドル、いなくなると…それも分からないの

アドル、答えてよ…私はアドルといたいの…いつまでもいてほしいの

アドル、お話が聞きたいの…私はいつまでも聞きたいの…

アドル、お話をしてよ…眠らないで…

アドル、私、貴方には死んでほしくない…殺したくない…

だから、目を覚まして…目を覚まして…死なないで…殺さないで…

ドウエル、殺さないで…アドルを殺さないで…アドルを殺さないで…

第六部「I live live live...」

バギツ…

その音は…遠くから聞こえてくる…。アドルはまどろみの闇の中で聞いている。

木の幹を無理に引き剥がす凄まじい破壊音…そして、何か野太く力強いものが衰弱しかすかにしか感じることがない感覚を刺激した。何か頭の奥で声が響く…力強い…男の声…。

…その意識は…徐々に…徐々に増していく。胸辺りに心地よい温かさが生まれていくと同時に…視界もはつきりし始めた。

「ドギ…」

「よお、お目覚めのようだな…さながら、眠りの森の王子様…かな」「悪い冗談だね…」

「だな…」

目の前には、ドギの姿があった。その頬骨と唇を上げた無骨な笑みで寝転がるアドルの髪をクシャクシャと撫でまわす。

「まったく、お前の無茶にもホトホト…飽きてきたよ」

「僕は…どうして…それにドギはここに？」

アドルは身を起こし、まだクラクラとする頭を押さえながら、ドギに訪ねると、ドギはニヤツと笑う。

「こいつを渡されてね」

その手には、小さなガラス瓶が乗っていた。

「これは…生命の薬」

「ああ、生命の薬…エリクサーだ」

イスでの戦いで、ダムとの最終戦で使った秘薬。魂さえも呼び戻し、肉体に戻すと言われる霊薬である。

「お前の嫁さんに渡されてたんだよ。お前が無茶して、危険にさら

された時のためにつてな」

「?…嫁…」

ドギの含み笑いにも似た答えにアドルは一瞬思考をめぐらせる。

「……………あつ」

ふと、その記憶に過ぎつたのは紅い髪の少女…「リリア…」…その一言に、ポカッ!!と何かに殴られた。

「なに!?!」

「そして、そいつがもう一つの答え…俺がここにいる理由だ」

仰天した表情のアドルを見て、さらに楽しそうに笑うドギは顔をしゃくつてみせる。

「ファエル…」

「もう、せつかくその人を呼んであげたのに!!」

そこにファエルが少し頬を膨らませたファエルが立っているのに、何が何か分ならず、目を白黒するアドルにドギは耳元に口を寄せる。

「この女泣かせ」

「なっ!?!」

一瞬、その言葉に体が再び麻痺したかのような感覚が襲ったかと思つと、憤怒の感情が襲い掛かる。

「嫁さんに告げ口しちまおうか」

「リリアとはそんなんじゃないよ!?!」

「じゃあ、なんなのよ?アドル君?リリアちゃんとは、どういった関係なのかなあ?」

「…ぐ……………」

ドギの憎たらしさまでの感じる問いにアドルは口をつぐみ、「それで…ドギはどうやって来れたんだ」と尋ねた。

その言葉にドギはスツと真顔に戻り、もう一度、ファエルのほうを見ながら答えた。

「だから、そこにいるファエルが教えてくれたんだよ。この迷いの森と呼ばれる所だな…」

「迷いの森…?」

「そうさ、ここに来る途中の村でも結構有名な噂話なんだぜ。この森では…小さな女の子の妖精が人をさらっていくってね…」

ドギの言葉にアドルはハツとした様にファエルを見た。それにただただ、ファエルは少し寂しそうな表情でうつむいている。

「ファエル…」

「私、最初はそんなつもりはなかったの…」アドルの問いただしよりも早く…ファエルは口を開いて、語り始めた。

「私は、最初はそんなつもりはなかったの…私はただ、アドルのように旅をしている人の話を聞いてみたかっただけ…私は動けないから…私は外の世界が知りたかったから…だから、通りがかる人を捕まえて、一晩のもてなしの代わりに旅のお話を聞かせてもらっていたの…」

第七部「I fight fight fight . . .」

大空洞のこの生臭さえ感じそうな脈打つ木の体内の中をアドルとドギは、空を飛び、先を行くフェアエルを追う形で駆けていた。

そんな中、アドルはフェアエルの言った言葉を心の中で反芻した。

フェアエルのその好奇心に取り付き、フェアエルを餌に次々と冒険者を襲い、養分にしていくもの。

フェアエルはそれを「ドウエル」と呼ぶ。フェアエルはそれをアドルに倒してほしいと望み、自分はそれで解放されたいと望んでいる。

「フェアエル」アドルは先行する彼女の名を呼び、叫んだ。

「君はそれでいいのか!!」

「アドル、お前何言ってるんだ!!」ドギはアドルの言葉に口を挟む。「そうしないと、冒険者達もオチオチと旅もできなくなるんだぜ! 何より、取り込まれた俺達が出るためには、そいつを倒す以外にないのは、フェアエル自身が言ってることじゃねえか!!」

「分かってる、だけど!!」アドルは頭を振り、ドギを見る。

「だけど、その取り付いているドウエルは、既にフェアエルに寄生して長いんだ!!」

アドルは前を向き、フェアエルの後姿を見ながら、叫び続ける。

「ドウエルは「フェアエル」を作り出している。何人もの「フェアエル」を生み出せるということは、ドウエルが既にフェアエルの全てを奪っているんじゃないのか!! その状態でドウエルを倒せば…」

アドルの叫びは次第に静まり、…最後には途切れた。

「なるほど…そういうことになるかもな」ドギは至って、冷静にそれを受け止める。

「確かにそうだな…お前の言いたいことは分かるさ……ったく、甘ちゃんだぜ…」

少しばかり毒づいてから、ドギはただ一言「そいつが…お前の良い所なんだがな」と呟いた。

「心配してくれてありがとう、アドル…」

フェアエルは顔の向きを変え、二人を見た。

「分かってる。私が消えてしまいかもしれないことは…」フェアエルは表情に影を落とす。

「私は、私の体で人が死んでいくのをしようがないって思ってた…だって、私は独りぼっちでなくなつたから…そして、ドウエルが消えたら、私も消えて一人になる…その方が怖かった」

それにドギが「確かに寂しいわな…一人つてのは…」と、ボソツと呟くのにフェアエルは小さくうなずく。

でも、それはいけないことよね…私だけじゃないんだもの…一人になることが寂しくなるのは私だけじゃない。

私が生きるために吸収した人達にも…アドルの話した人たちのように待っている人がいるんでしょう？

その人達を一人ぼっちにさせて、私が生きてていいの？…

それは、アドルとドギの心に響くものだった…。

「まあ、生きるためだったならな…」ドギはフェアエルに言った。

「だが、お前の場合は違うな…お前のは人を吸収して生きながらえていたわけじゃねえ…悪いのは、そのドウエルって奴さ…」ドギの話アドルは無言で聞いていた。

「気分最悪だぜ…見た目にも可愛らしいガキンちょを捕まえて、利用する輩つてのは…さっさとツラおがんで、ぶつちめてやりてえぜ…！」

「だから、私を殺して…もう作りたくないから…私は大丈夫だもん。私は元々、一人ぼっちだったんだもの…だから、一人ぼっちは寂し

くないよ」

「……………」

アドルはその二人の言葉を胸に収め、唇を噛む。

『フェアエルよ、私を裏切るのか…』

その声はどこからともなく響いてきた…。その声は出所を感じず、躍動する木々の細胞が震えて出されたようであった。

「ドウエル!!」

『フェアエル、お前は死ぬこともいとわないのか…』

「私は私。もう、あなたに負けない!! 私はあなたを…私を消してやる!!」

『そうか、それは悲しい判断だな…』

その声を最後に凄まじい躍動が始まり、その躍動が収まった頃…

「くっ!!、…へっ、ゴチャゴチャとまあ…」と、毒づくドギは背中にあったグレートアックスを手取る。

「どうしても、僕達を生かさないとつもりなんだね…」アドルも少し悲しげに呟き、鞘から銀色の輝きを放つ剣を抜く。

脈動を終えた空間には…多くの木人の姿があった…。

人というものはなんなのであろうか…

私が人とあった事で覚えた思いはそんなものだった

だから私は、彼らに接してきた。

つらいこと、楽しいこと、怖いこと、面白いこと、嫌なこと、

良かったこと…

そして

好きな人のこと

それがどんな人でもそうだった。悪い人も…良い人も…

あの人達は誰かのために孤独だけど、冒険を体験して、その誰かのために帰途についていた。

一人ぼっちだけど、一人ぼっちでない彼ら。そんな彼らを…私は…私は…

「たくつ！きりがないぜ！！いい加減にしるよなあ！！おい！！」
ドギは凄まじい悪態を吐いて、木人達を一薙ぎで掻っ捌いていく。少々、アドルもドギの気持ち分からないでもなかった。

走り抜ける通りには次々と木人の姿が浮かび上がり、三人に群がってくる。

宙に浮くフェアエルには、何とかその攻防をかわせても地を走る二人はやはり、障害以外何物ではなかった。

「フェアエル！！まだ、先なのか！！」

アドルはまた一つの木人を薙ぎ払い、フェアエルに問うた。

「もうすぐです！！この道を…ああ！！」「どうした！！」

フェアエルの絶叫にドギは答え、その言葉を理解した。

目の前の通路に壁がずり上がり、行く手をさえぎろうとする。

「他に道は！！」「馬鹿、そんなのを探したら、全部閉じられちまうだろうが！！」

アドルの詰問をドギは一蹴する。

「じゃあ、どうするんだ」

アドルはまた一つ薙ぎ払い、叫んだ。

「…俺自身でクソ野郎を刈ってやりたかったぜ。…」

ドギは軽く思案すると軽く舌打ち、グレートアックスを構えた。

「ドギ！！」「アドル、俺の後を追ってこい！！」

ドギがアドルの声を掻き消す大きな一声を上げると、アックスをぶん投げ、見届ける間もなく、木人を蹴散らすように走り出した。

アックスの軌跡は直線を描き、迫上がる壁と横壁に深々と刺しこまれ、楔くわの役を担い、壁が止まった。

「ドギ！！」「アドル！！」

先行していたドギが壁を背に両の手を組むと腰を落とし、「こい

「!!」と一声上げた。

その行動を察したアドルは、素早く鞘に剣を戻し、ドギの元に駆け出す。

「帰りの一風呂浴びる薪は作っておいてやる!!俺の分まで暴れてきな!!」

ニヤツと笑い、ドギは腰を踏ん張る。アドルの右足が大きく上がり、ドギの手を踏みしめた瞬間、

「うおりゃあああああ!!」

ドギツイ怒声と共にアドルの体が舞い、壁の向こうに消える。

それと同時にアックスは壁の圧力に負け、ガキーンという音を弾かせた。

刃が割れた状態で地に落ちていき、壁が最上段に上がりきる鈍い音が道に響き渡る。

その光景を見ながら、ドギは薄く笑い、現実にも目を向ける。

目の前の木人の群れに…

「たく、刈ったはいいいけど、燃えませんでした…てのは無しだぜ、お前ら」

背の腰に挿していた残り二本のハンドアックスを両手に構え、怒声を上げる。

「さあ、最初に薪にされて火にくべられたい奴からきやがれ!!雑木野郎ドモ!!!!」

第八部「I dead dead dead . . .」

アドルの飛び込んだ空間は…開けた所であった。

ただっ広く、何かの胞子でも流れているのだろうか…白く煙るものが部屋全体をぼんやりとした空間にしていた。

息を潜め、身構えるアドルの横にファエルが降り立った。

「ファエル」

「気をつけてください、「私」がいます」

ファエルの警戒の言葉に神経をさらに高めた。

『そう警戒する必要もないんだよ…二人とも』

その言葉は部屋を包む空間が発している…先ほどと同じ雰囲気のものを感じた。

「ドウエルか…」

しばらくして、アドルの声が再び静まり返ったこの空洞の中で響き渡る。

瞬間、空間の微粒子が逆巻き、上部に消えていく。透き通るような暗い空間が広がり…そいつはいた。

木の幹に張り付いた木彫…といっても誤解のような成熟した女性像が埋め込まれていた。

その額に輝くのは、黒き光を放つ…「黒真珠…!？」

『どうだ、取引をしないか?』アドルの呟きをさえぎるようにドウエルが口を挟んだ。

『私はお前達を外界に送り届けてやろう…これ以上、私の世界を壊されてしまつては、困るのでな…』

「何!？」アドルの眉が少し跳ねる。

『もちろん、ファエルも同行させよう…私もそのファエルだけは扱いかねない存在だった』

「ドウエル、本当なの」ファエルはつい言葉を挟みいれる。

『本当さ、ファエル、お前が望みさえすれば、私はお前を手放そう。もう私はここまで成長したのだ…お前は必要がない』

「…」その言葉にファエルの心が揺れ動くのをアドル自身、痛いほど分かった。

呪縛から開放されるのだ…それは彼女がなによりも望んだことだから…

『悩む必要もあるまい…ファエル、お前は自由になるのだ…ふふふ』

ドウエルは凍りついた表情に笑みを浮かべたいのか、…黒真珠の中に怪しい光を灯した。

「ファエル…」アドルは無言のファエルに問うた。

…ファエルの沈黙は長く続いた。そして、その沈黙を破ったのは、

「駄目え!!!」

ファエルの絶叫が響き、アドルの背後に走り出した。

アドルがその方向に向いた時、ファエルは

幾人もの「ファエル」持つ短刀に…胸元を貫かれていたファエルの姿。

『ちい、!!ぬかったな!!「ファエル」共が!!』 「ファエル!!!」

「来ちゃ駄目!!アドル!!!」

ドウエルの言葉と駆け寄ろうとするアドルの言葉を遮るようにファエルが言い放つ。

「だって、ここは私が食い止める…から」

「ファエル…」

いまだ踏みとどまるアドルの姿にフェアエルはただ、震える唇で語りだした。

「分かってた、ドウエルは嘘をついているって…分かってた…」

「フェアエル」

「そうやって、私を騙して…私を奪ったんだもの…」

「フェアエル!!」

「だから、いつて。私が「私」を抑えている間に、私を…私を殺してえ!!アドルウ!!」

フェアエルの振り絞る声がアドルの胸をえぐり抜く。…一瞬、その言葉に唇を噛み締め、踵を返す。

「ドウエー…ル…ル…ル!!」

鞘から抜かれた剣と盾を手にアドルはドウエルに向け、猛然と突っ込む。

「人間風情が!!」ドウエルがその光景をあざ笑うように黒真珠を発光させ、紫に燃え上がる炎を作り上げる。

「死ねえ!!!!!!」

ドウンツ!!と爆音を上げ、肥大化した火の玉がアドルめがけて飛んでくる。

「オオオオオオオオオオオツ!!」

火の玉が当たる瞬間、アドルは地に引きずるように垂れた剣を逆袈裟に体の回転を加え、跳ね上がるように切り上げる。

火の玉は真つ二つに割れ、後方で大きく爆ぜた。

「まさか、その剣は!!」

「ドウエル!!」

アドルの体はいまだ宙にあり、一回転した体から放たれた銀の輝きが…黒真珠を一閃した。

「クレリア・ソード…」ドウエルの呟きにアドルは面を上げる。

「そうか、分身である我に…主たる「ダム」の力が通わぬったのは…貴様か…」

「女神の光を抱いて消える…黒真珠」

アドルは床に転がる真っ二つになった黒真珠を剣の柄頭で砕き散
った瞬間、辺りを真っ白い光が包み、
まばゆい光に目を覆うアドルの耳に…

「ありがとう…」という澄んだファエルの声が響いた…。

最終部「Faels Leaf」

森林は挿鉢状に抉り取られたかのように土が向き出しになった大地となっていた。

時間にして正午の程であろう…遮るものないこの地の中央に立つアドルは…その熱さも感じるような暖かい日差しの中…柄頭を地に押し付けた形で固まっていた。

しばらくして、彼は力なく立ち上がり…空を仰ぐ…。

どれ程の時をここで過ごしたのだろうか…アドルの心にそんな言葉が過ぎった。

ファエルに誘われるまま、村に止まった一日。

囚われた日々…そして、

ファエルが消えた日…

ファエルの言葉が今でも残っている。

「私を…私を殺してえ！！アドルウ！！」

ファエルの笑顔がここにあった。…キラキラと瞳を輝かせて見つめてくる彼女の顔があった。

それをアドルは…自らの手で奪った…ファエルの自由のために…そして、ファエルの姿を失った。

「終わったんだな…アドル」

背後にドギが立っていた。衣服は多少傷ついていたが、それ以外の外傷もなく…刃のこぼれたハンドアックスを片手にまとめて、アドルに近寄ってくる…。

「ファエルはいつちまったか…」

「うん、僕がフェアエルを殺したんだよ……」

「アドル……」その言葉震えるアドルのシヨルダーに手を置いた。

「お前が悪いんじゃない。悪いのは、ドウエルって奴さ……」

「でも、殺したのは僕だ……僕なんだぞ……！」

「アドル……！！」半狂乱になりかけたアドルをドギが叱咤する。

「フェアエルを殺したつてののかよ。お前が！？違つたらう……！殺したのは、ドウエルじゃねえか……！」

「ドギ……」

「ドウエルがあの子の体に取り付いた時点で……フェアエルは死んでいったんだよ」

「……………」

「本当の心をただ一切れの存在、フェアエルに居させただけだ……フェアエル自身は本体を失つた時点で……既に死んでいたんだ……意思のもてない肉体にフェアエルの心はなかったんだ……そして、心もドウエルに囚われ、弄ばれていたんだ」

「……ドギ」

「お前はそのまま残されたフェアエルの心を開放したんだ……ドウエルという呪縛から開放し……救つたんだ」そこで、ドギは小さく息を吐き、手を離す。

「お前はフェアエルを殺しちゃいない……お前はフェアエルの心を救つたんだ……」

「ありがとう、ドギ」しばらくの静寂がアドルの心を休ませたのだろう、ゆっくりと口を開く。

「また、君に助けられたね……本当にすまないな」

「そいつはいいこなしてもんだぜ、アドル」ドギはニツと笑い、頭を掻いていたが、溜め息を吐く。

「しかしよお、無駄骨折つちまつたぜ……」

「えっ……」

「せつかく、何風呂か分の薪ができたかと思つたのによ……白い光に

巻き込まれた瞬間、全部消えちまいやがんだぜ、酷え話だと思わねえか？」

ドギの言葉にアドルは少しばかり吹き出した。

「いいさ、この先にある町って、熱いお湯の出る土地らしいよ、そこのお風呂なら、薪なんて必要ないさ」

「何？熱いお湯！？それはどういうことだ？」

「あはは、なんだ。ドギ、知らなかったのか？」

乾ききらない土の大地に二人の声が響く。

アドルはただ目を細め、空を見た。青く染まる中をゆったりと流れる白い雲…。

風に舞う森林のザワメキのメロディに耳を傾け、ドギとの話にも耳を向けていた。

全ての心地よさに軽く目を閉じる…。

あの村で止まったときに感じた間は感じない…あるのは、フェアエルとの思い出…

「ドギ」

「うん？」

「ここが再び、木々が生え出したら…戻ってこようと思うんだ…」

「そうか…そいつはいい考えだな」

「きつと、彼女はここにいるよ…また、あの笑顔で…迎え入れてくれる彼女がいるから…」

「その時は、もう仲間はすれなんてごめんだぜ？アドル」

「分かってるよ」

二人は丘の上に立ち、土色の大地を見つめていた。

そこに…彼女の笑顔と姿を思い浮かべ、…再び緑の大地が広がり、再開できることを思い描きながら…

風に誘われるまま、フェアエルの森の見える丘を後にした…。

最終部「Faels Leaf」(後書き)

最後まで見ていただきありがとうございます。Ysという作品のイメージを私なりに表現しつつのオリジナル作品でしたが、如何でしたでしょうか?感想等、ありましたら、お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7330f/>

WANDERERS FROM Ys AnotherStory =深緑の森精=

2010年10月9日10時49分発行